

# 『Saudade サウダーヂ』

後藤 希望

リオデジャネイロ・オリンピックの閉会式で Saudade 『サウダーヂ』というテーマのセグメントが演出され、NHKの生中継では、この一分十秒の場面に実況が添えられた。最初は、スタジアムが暗転したところで、「スタジアムが暗くなりました」とアナウンスがあり、フィールドの一箇所にスポットライトが当たる。すると「今大会では近代オリンピックでは初めて、選手村に大切な人に哀悼の意を捧げる場所が設けられました」と続く。それから『サウダーヂ』という詩が聞こえてきて、「会場では詩が読み上げられています」「人生には輝かしい瞬間だけでは無く、悲しみの瞬間もあることを表現しています」と締めくくられる。以上、四つのナレーションである。一度聴いたら忘れられない低音の声が読み上げる詩をモチーフとするこのセグメントは、短いながら、実はきわめて奥深いものだった。

オリンピック放送機構（以下OBS）から、閉会式の放送権を取得している放送局に対し、生中継の関係者のみにはあるが、事前に極秘資料が渡された。閉会式の概要がわかるその資料によって、『サウダーヂ』の場面で何が描かれるかを、われわれは演出家との会見の前に知ることができるのだ。資料は英語とポルトガル語で書かれていたので、まず、内容に差異がないかを確かめた。英語の誤訳が後に大きな騒動を引き起こす可能性があるからだ。

英語版の資料に、「サウダーヂ」とは「ノスタルジア」「失った人や物」を表す概念で、ポルトガル語にのみ存在する言葉」という注釈があった。二〇〇八年にイギリスの会社が行った「翻訳不可能な単語」に関す

る千人の翻訳家への調査によると、七位にランクインした言葉だ。ブラジル人や日系ブラジル人達に、この翻訳家泣かせの単語の解説をしても良かった。その結果、サウダーヂとは、「誰か」あるいは「何か」が今は近くに存在しないことで引き起こされる感情のことで、もう一度会いたい、あるいは体感したいという気持ちのことだと理解した。ポルノグラフィティやサザンオールスターズのレバートリーでこの言葉を知っている人が日本では多いらしい。

閉会式メディアガイドには、サンパウロ出身のアーティスト、アルナルド・アントウネスが書いた『サウダーヂ』という詩、本人が朗読すること、スタジアムでの演出、そして、なぜこのセグメントが含まれているのかが書かれていた。曰く「古代オリンピックが行われていたオリンピックから石を運び、『追悼を捧げる場所』を選手村に設置。そこを過去のオリンピックで命を落とした選手たちに哀悼を捧げる場所とした。そして、閉会式は、スタジアムにいる人々、テレビを通して閉会式を見ている人々それぞれが、今は亡き愛する人々を想う時」とあった。

『サウダーヂ』の詩の一節に、「これまでの全ての経験は私の体の中にある。だから寂しくない。肝臓、脾臓、腎臓のように」とあり、この部分を読んだNHK閉会式チームの誰もが、シユテファン・ヘンツェ氏を思い出した。リオ大会の期間中、自国の選手や関係者とタクシーで移動中に交通事故に遭い、閉会式の一週間ほど前に息を取ったドイツ・カヌーシラーム代表コーチ（アテネ五輪・銀メダリスト）で、この故人から提供された四つの臓器が四人の命を救ったばかりだった。

閉会式の演出家たちによる会見場での質疑応答で、筆者は、『サウダーチ』の詩の内容は、これまでの過去の大会で亡くなった選手というより、今大会期間中に命を落としたドイツのヘンツェ氏のことを詩っているのではないかと質問してみた。演出家の答えが要領を得なかったので、マイクを手離していなかったのを良いことに、「ミュンヘン大会で命を落とした選手やコーチが大勢いる。バンクーバー大会では公式練習中の事故で亡くなった選手に閉会式で黙祷を捧げた。これまでも、追悼する機会や場所を設けることができたはずだ。なぜ、リオなのか？」と追い打ちをかけた。すると、演出家ではなく国際オリンピック委員会（以下IOC）の傘下にあるOBSのCEOが応答した。「あなたの言う通り、これまでの大会で多くの選手たちが亡くなった。しかし、この詩は随分前に書かれたもので、ヘンツェ氏の事故とは一切関係ない」というのだ。演出家ではなく、OBSのCEOが答え始めた時点で、IOC主導の一コマであると筆者は察知した。五輪初の難民選手団の一員、ユスラ・マルデイニ選手をドイツ・オリンピック委員会が引き取ったこともあり、その時は敢えて突っ込まなかったが、「ドイツ出身のトーマス・バッハ会長のもとで行われる大会はドイツが透けて見える」との確信を得たのだった。

会見場を後にしてリサーチしてみると、二〇一五年三月、IOCは近代オリンピック史上で初めて、リオデジャネイロ・オリンピックの選手村に《追悼を捧げる場所》を設け、閉会式にこのことを反映させると発表していることを知った。更にリサーチを進めると、一九七二年ドイツ・ミュンヘン大会で起きた悲劇、パレスチナ武装組織「黒い九月」によるテロ事件で犠牲になったイスラエル選手団の重量挙げ選手ヨセフ・ロマーノ氏の妻イラーナさんによる四十年以上の活動が少なからず起因していることもわかった。これまで公式の追悼行事を行っていないIOCに対して、イラーナさんは、夫を含む犠牲となった十一人のイスラエル人に対して閉会式で黙祷を捧げることを求め続けてきたのだ。事件から四十年目にあたる二〇二二年のロンドン大会で、閉会式での黙祷を求めたおおよそ十二万人の署名が提出された。ロンドン大会同様、リオ大会の閉会式でも閉会式でも黙祷が捧げられることはなかった。別の遺族のア

ンキー・スピッツァー氏は「一九七六年に初めてIOCに黙祷の実施を願った時、黙祷をすればアラブ諸国二十一カ国の選手団が去ってしまう」と説明された」と語っている。「五輪と政治を結びつけない」という大前提のもと、IOCが「黙祷」を行わず「追悼の場所」を設置したのは、反イスラエルのアラブ諸国への配慮だけではない。

リオ大会の閉会式の演出を手掛けたフェルナンド・メイイレレス監督も「閉会式で黙祷を捧げる提案をIOCにしたが叶わなかった」とNHKの単独インタビューで答えている。ブラジル時間の八月五日午後八時から始まる閉会式と十二時間の時差で八月六日朝八時にあたる日本に、ある共通点を見つけたメイイレレス監督は「広島で七十回目の原爆記念の式典が開催される時間で、一分間の黙祷が捧げられる。閉会式が始まって十五分後の八時十五分に全人類で広島原爆記念日に一分間の黙祷を捧げたかった。平和のメッセージをシヨールの中に組み込み、人類最大の悲劇について語る演出をしたいと提案したが、政治的な理由で不可となった」「閉会式の冒頭に米国を批判することにもなりかねない。一分間の非難になりうるからだ」と無念さを語ってくれた。日本からも、広島市の松井一実市長が開会式で参加者に黙祷を呼び掛けることをIOCに提案していた。

ジャック・ロゲ前IOC会長はヨットの代表選手としてミュンヘン大会に出場しており、事件の切迫した事態を体験している。在職中、セキユリティ強化に力を入れたのも、自らの経験からだと言われている。彼はロンドン大会の開会式での黙祷を認めず、非難を浴びた。ドイツ人初のIOC会長、バッハ氏にとつて初めての夏季大会となったリオ二〇一六。自国ドイツで起きた五輪史上最悪の悲劇の着地点がないまま過ぎた四十四年目。現職のアメリカ大統領として初めてオバマ大統領が広島を訪れた年とも重なった。過ぎ去った日々の熱い戦いと選手達を想う閉会式『サウダーチ』は、「いかなる国の扱いも差があつてはいけない」という五輪憲章に従ってバッハ会長が演出した苦肉の策であり、今、世界が直面しているテロと核への戒めとも解釈できる一分十秒だった。

(ことう のぞみ)